

1.授業の外観

学生は小児保健において、乳幼児から学童期(14歳時)まで子どもを取り巻く社会の中で小児の心身両面の健康増進を図るために必要な対応を学習し、適切な救急救命処置法、子どもの異常や病気を早期発見できる視点を獲得することを目標としている。学生は、乳幼児の抱き方、衣服の着脱、食事の世話、排泄とおむつ交換、乳幼児の身体計測、生理機能の測定、心肺蘇生法、神経系の発達評価、事故と応急手当、歯の健康、認定こども園での環境衛生について学び、保育士としての実践力を身につける。本講義は保育士養成コースの必須科目であり、小児保健の内容は、小児の発達の理解、医学の基礎知識を教育教授する科目である。筆者は、保育士コースにおいて、小児期に発症発見されやすい疾患(知的障害、自閉症)などについても分野横断的に教育を実施した。受講生は幼児教育の学生15人であり、幼稚園教諭免許取得とともに、保育士資格を獲得することを目指している学生である。今回、0歳児から修学前幼児および母親に來校いただいて子どもの発達過程と母親の育児環境の体験を語っていただく実習型講義ができないため、座学中心となった。顔の見えない学生の学びと興味関心の保持のため、学生に前回の講義の振り返りを割り当てる学生プレゼンテーションを毎回実施し、学生の学習成果と事後学習を評価するために、授業開始30分を「前回の講義内容の確認」として「講義のまとめ」の発表時間として、担当学生がプレゼンテーションを行った。学生は前回講義の確認資料を作成し、それに学生の学びの情報を加え、他

の学生に内容提示するスキルを身につけることを目標とした。また、発達障害児を抱えた母親の心労については youtube 動画を用いて説明した。本講義では、「こどもの保健」(教科書および講義用補助プリントを使用し、専門用語の定義、用語解説を実施した。乳児来所日以外は、学生は、「こどもの保健」の解説を聞くという一方向性の講義形態となるが多かったが、学生が予習において解らない箇所はその都度質問を受け付けた。

2.授業の評価法

授業評価は学生からの無記名自由記載アンケートを回収した。また、Q:卒業時の到達目標である教育学部 DP1-4のそれぞれについて、この授業の受講前と比較して向上したかについて、4段階で自己評価した(1:向上していない, 2:どちらかと言えば向上していない, 3:どちらかと言えば向上した, 4:向上した)

3.授業評価結果 学生全員 DP1-4 すべて”4”であった。

4.地域社会を核とした教育と研究のつながり

座学の知識では、乳児を扱うことはできない。それに代わる資料として、動画を使用した。認定こども園が入所させる最年少乳児、障害を持つ児童と母親の思い、保健福祉制度について知ることは、認定こども園を中心とする母子地域コミュニティに対する小児保健と乳幼児の発達の教育の核となる。

5.学生の感想 「今まで自分が知っていた知識に加えて、感染症予防対策やコロナウイルス・免疫機能について知識を深めることができた」「発達障害や精神病との関連について学ぶことができた」「自己免疫疾患特にリウマチ」の病状を知ることができた。保育に必要な小児保健は幼児の成長発達の様子を詳しく知り、さらに保育士が専門家として保護者に小児保健の知識を指導することを考慮し、難しいといわれる小児保健を図・イラスト・写真を利用し、できるだけわかりやすく親しみやすい内容とした。講義の事前にプリント（パワーポイント）を配布し、学生自身の iPhone や android でみながらの受講とした。特に、免疫の仕組みと疾病については詳細に解説する。福祉や保育に関する基礎的な教養を身につけ保育士としての基礎知識を知り、保育園での実践活動に役立てる必要がある。児童福祉、保育原理、発達心理学を学び、「小児栄養」「乳幼児 6 ヶ月程度」など、保育、夜間保育、病弱保育の対象である子どもを理解するため内容とした。それらの知識は、保育所や障害児・障害者の施設で行う「保育実習」を通じて保育の現場を実践的・体系的な学習へと発展させることを目的とする。特に、免疫の仕組みについて詳細に学び、感染症、アレルギー反応（食事アレルギー、花粉症など）、自己免疫疾患、小児がん発生についての知識を獲得すること、発達障害と精神疾患についての体系的知識を得ることができた。特に、共同講義者となる岡田英作先生の児（2歳）幼児に來所いただき、幼児の発達段階について 2 か月ごとに確認いただく実習を取り入れた。「社会福祉制度など保育士として知るべき知識の学びが深

まった」「講義振り返りがあったことで自分でも深く調べ自分の言葉でまとめることができた」「他者の発表を聞くことでより学びが深まった」「子どもの健康や保護者の思いについても考えることができた」「福祉制度・社会保障制度について保育士として現場に出た時、知っておくべき知識が身に付いた」「出産に関する行政手続きや母子手帳の発行について知ることができた」「身の回りにある幼児の危険物と危険回避を学ぶことができた」「保育士としての仕事イメージがわいた」「子どものアレルギーやアレルギーについての知識が学ぶことができた」「育児環境整備や課題を見つける力を醸成できた」「病弱保育の現状を知ることができた」現場情報の提供もあった。また、母親からの意見を聞くだけではなく、育児の工夫を私たちがすべきだった」「子どもの病気やアレルギーなど実際の現場で重要になる知識を得ることができた。精神障害者年金や身体障害者年金の支給の仕組みをすることができた」などが感想である。

6.まとめ

学生は、保育士資格は本コースを終了すれば取得できるが、こども園への採用試験対策を意識していた。小児保健という医学系科目について興味を保ちながら受講していたようである。筆者は、こども園採用試験に出題されそうな内容に特化するのではなく、こども園(特に病弱保育)で実際に役立つ乳児一般の知識を教育教授するようにつとめた。受講生が 18 歳であることから、保育士とは何をやる仕事なのかの具体的モデルがわからない様子であり、乳児の特徴を観察するだけでも十分であるように思われた。